

多文化共生の扉

このコーナーへの意見・感想は、協働推進課国際交流・多文化共生担当（市民活動センター内） ☎0201まで気軽に寄せてください。

ジープニー

フィリピン独特のユニークな公共交通機関
多文化共生相談員 竹下シェラさん



フィリピンで売られている「ジープニー」のミニカー。おみやげとしても人気があるそうです。

（約20円）、その後1kmごとに1.4ペソ（約3円）ずつ上がっていきます。それに比べてバスは5km＝10ペソ（約24円）、その後1kmごとに1.85ペソ（約4円）ずつ上がっていきます。

ジープニーで目的地が近くなれば「パラー（止めて）」と声を掛けますが、聞こえない時は天井や車体を叩きながら声を掛けます。運賃は直接運転手に渡しますが、人が多くて渡せないときには人から人に手渡しで運転手に届き、お釣りも他人の手から手を通して返ってきます。

姿はペインティング、ステッカー、電飾などで美しく派手に飾られ、それぞれが強い表現力で個性的なスタイルをしています。運転手と共に政府の保護の元でそれぞれが公共の乗り物として、フィリピンの顔として活躍しています。

世界中にはいろいろな乗り物がありますが、フィリピンには通称「キングオブザロード」と呼ばれる乗り物ジープニーがあります。

第二次世界大戦が終わり、フィリピンに駐留していた米軍は、帰国するときジープを住民に無償であるいは格安で譲り帰国しました。ジープを手にした人々は知恵を出し合ってジープを改造し、今のジープニーの形を作り上げていったのです。

次は名前ですが、狭い車内では向き合って座っている人と人の膝（英語でknee（ニー））が当たる狭さからジープとニーをくっつけてジープニーと呼ばれるようになりました。

定員は基本が15～17人ですが、乗れるだけ乗せてバスの走らない道幅の狭い場所をととても安い運賃で走ります。ちなみにそのジープニーの初乗り運賃は4km＝8ペソ



【106】平成25年度に廿日市市で引き取られた犬や猫の数です。それらの犬や猫は、広島県動物愛護センターに引き取られ、数匹は新しい飼い主が見つかりますが、ほとんどが殺処分という不幸な最後を迎えます。

近年では、犬の引き取りは減少傾向にありますが、猫については増加傾向にあり、100頭を超えました。

殺処分されている大部分は、野良猫が産んだ離乳前の子猫たちです。処分される子猫をどのように減らすかが重要な課題となっています。

問合せ 環境政策課 ☎09132

■平成25年度の引き取り頭数（速報値）

飼い犬	野良犬	飼い猫	野良猫	合計
2頭	2頭	14頭	88頭	106頭

9月20日～26日は、「動物愛護週間」です

■どうすれば、野良猫の引き取り頭数を減らせるの？

野良猫の引き取りの大部分は、野良猫が出産した子猫です。猫は1回の出産で4～8頭の子猫を産み、1年間で20頭以上に増えます。

猫を傷つけないという優しさから、不妊去勢手術をせずにえさだけを与える行為は繁殖を促してしまいます。えさを与えるのなら、しつけや不妊去勢手術、糞尿の世話まで責任を持ってください。

地域猫活動

近年、糞尿などの野良猫を巡るトラブルを解決する方法として「地域猫活動」が目立っています。

「地域猫活動」は、地域住民の合意や協力が必要で、住民やボラ

ンティアグループなどが住宅密集地などで飼い主のいない猫に不妊去勢手術を実施し、一代限りの命を全うするまで適切に管理する活動です。

■近所の人を困らせない

ペットの飼い方をしましょう

市には、ペットに関する苦情が多数寄せられています。それらの多くが飼い主の無責任な飼い方が原因と考えられます。

近隣に迷惑を掛けないよう、屋内で飼うなどの気配りと正しいしつけをして、責任をもった飼い方をしましょう。

動物愛護推進員

地域の身近な相談員として、

犬・猫などの動物の愛護と適正な飼い方の普及啓発や助言などを行っています。動物の飼い方などを推進員に相談したい場合は、まずは、広島県動物愛護センター（☎084866511）に連絡してください。

■どうぶつ愛護パネル展

市では、動物の命について考えるパネル展を実施します。

とき 9月17日(水)～30日(火)
ところ 市役所1階市民ロビー

■どうぶつ愛護のつどい

広島県主催の「どうぶつ愛護のつどい」が開催されます。

とき 9月23日(祝)10時～15時
ところ 広島県立びんご運動公園

この欄は、市民と市職員で構成する「広報人権問題シリーズ編集委員会」が編集しています

ゆるやかにつながる町



問合せ 人権・男女共同推進課 ☎09136

1998（平成10）年から14年連続で3万人台を記録していた自殺者が、昨年は約2万7千人に減少したというまとめが、警察庁から発表されました。2009（平成21）年に「地域自殺対策緊急強化基金」が創設され、市区町村単位で自殺を防ぐ活動に取り組んでいる効果があったのでは、という内閣府の談もありました。

それでも1日当たり70人、約20分に1人が、日本のどこかで命を絶っていることになりました。更に未遂者は、その10倍と推測されるそうです。驚くべきこの事実は、いつ、身近に起こるか分かりません。他人事として片付けられないほど深刻です。

当事者にならないことは、もちろんですが、このような追いつめられた人に対し、私たちは何ができるのでしょうか。

そんな時に出会ったのが、「生き心地の良い町」（岡檀著）という本です。「生き心地が良い」と言える町がほんとうにあったのです。

「生き心地の良い町」の自殺予防因子

これは17年間「自殺者のいない町（徳島K町）」を、研究者が4年間の現地調査をし、まとめたものです。人口推移や地理的条件、歴史的な背景を基に、聞きとりやアンケート調査をして、この町にある「自殺予防因子」を分析しています。

- ① いろいろな人が住んでもよい、いたほうがよい
- ② 人物本位主義をつらぬく
- ③ どうせ自分なんて、と考えない
- ④ 「病」は市※に出せ ※（市「いち」）は、「周囲」ということ。病気だけでなく、問題全般を早く人に言いましようということ
- ⑤ ゆるやかにつながる

詳細は省きますが、なるほどどうなずけることばかりです。だから17年も「自殺者ゼロ」の町なのです。でも、これは一朝一夕に築けることではありません。「生き心地の良い町」とは⑤のゆるやかにつながるに大きなヒントがあるように思えます。

「避けられない死から避けられる死にするために

いろいろな人が住んでいるのは当然ですが、多くの人は「違い」を受け入れられ、時には距離を保ちながら、お付き合いをしていることでしょうか。「助ける人」も「助けられる人」も固定しないで、時には立場が変わることもあるといいですね。重すぎず、軽すぎない、程よい人間関係が快適なようです。これが「ゆるやかにつながる」ことの知恵なのでしょう。

また、人の心は弱く、壊れやすいことを分かってあっているからこそ「誰か」と支えあい「誰か」と共感することを求めあうのだと思います。

「避けられない死」から「避けられる死」にする力になるのは、その「誰か」です。

「誰か」になれるのは「誰でも」ではないでしょうか。あなたであり、私でもあるのです。

そのことに思いをめぐらせて、「私」と同じように「あなた」も大切な人です。と言えるつながりを私たちの町に広げていきたいものです。

「生き心地の良い町」岡檀著